

《第78回例会》



スタイル・ブリゼ(Style brise)とは、17世紀にフランスのリュート音楽の分野に起こった分散奏法で、優美で即興的な趣味に富む技法のこと。同時代のフランスのクラヴサン奏者や、J.S.バッハに至るドイツの音楽家は主に鍵盤音楽の分野にこれを取り入れた。F.ショパンの音楽には、バロック及び前古典派からの影響が見られ、まず旋律の中の和声音を保続する基本的な方法としてこれを用い、オクターヴの分散化や、高度な対位法との融合等の方法でピアノ技法に様式化した。



《お話1》

- ♪ F.クーペラン:クラヴサン曲集 第1巻第5組曲イ長調より(ロジヴィエール)、J.S.バッハ:フランス組曲第2番ハ短調より(アルマンド)
- ♪ ショパン:練習曲 変ホ長調 作品 10-11、ノクターン 嬰へ長調 作品 15-2
- ♪ ショパン:バラード第1番 ト短調 作品 23

加藤 一郎

加藤 一郎
久保田 友
國谷 聖香

《お話2》

- ♪ ショパン:練習曲 変ホ短調 作品 10-6、ノクターン ロ長調 作品 62-1
- ♪ ショパン:ソナタ第3番 ロ短調 作品 58
- ♪ ショパン:バラード第4番 ヘ短調 作品 52

加藤 一郎
坂田 朋優
長崎 結美
田口 綾子

加藤 一郎 (かとう いちろう)

東京芸術大学器楽科ピアノ専攻卒業、ヴィンタートゥア音楽院ソリストコース留学、金沢大学、愛知県立芸術大学等を経て、現在、国立音楽大学准教授。リサイタル、協奏曲、室内楽、伴奏等の演奏活動、及びNHK テレビ・ラジオ等に出演多数。



2016年
10月2日(日)
 13:30 開演
 (13:00 開場)

札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール (北16東9)
 入場料: 一般 1500 (当日 2000) 円、学生 500 (1000) 円

お問合せ先: 011-556-8834 (安藤)、080-4049-0956 (当日のみ)
 e-mail: hokkaidopolandca@gmail.com
 プレイガイド: 大丸 011-221-3900、道新 011-241-3871
 お席に限りがあります(約100席)。お早めにお求めください。

“Polski Namiot”、2016年6月2日(木)～5日(日)9:00～21:00、北大総合博物館付近、主催：北海道大学ポーランド人留学生会、協賛：ポーランド広報文化センター

(参考)2016年度の会員の動向：入会6人、退会6人。会員数：88人(2016.8.31現在)

第2号議案 2016年度収支決算報告について(別紙のとおり)(報告 佐々木保子)

第3号議案 2017年度(2016.9-2017.8)活動計画について(提案 小林暁子)

1. 《第30回定例総会・お茶の会》、2016年10月29日(土)総会 14:30～お茶会 15:30～、北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室
2. 《第78回例会》レクチャーコンサート：ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して、出演：加藤一郎、久保田友、國谷聖香、坂田朋優、長崎結美、田口綾子、2016年10月2日(日)13:30～、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール
3. 《第79回例会》アンジェイ・ワイダ監督を偲んで、お話：中島洋、ビデオ上映『地下水道』『灰とダイヤモンド』、2016年12月5日(月)18:00～22:00、札幌エルプラザ 4F 大研修室
4. 朗読会：午後のポエジア 7、2017年6月頃
5. 会誌「ポーレ」第89号(2016年9月1日)、第90号(2017年1月)、第91号(同5月)発行
6. オンライン広報の強化

第4号議案 2017年度予算(案)について(別紙のとおり)(報告 佐々木保子)

第5号議案 2017年度役員等案について(提案 小林暁子)

(会則第6条に基づく役員) 新任

会 長：安藤厚

副 会 長：小笠原正明、霜田千代磨

運営委員：新井藤子、安藤むつみ、薄井豊美、越野剛、小林美保、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、高橋健一郎、塚本智宏、富山信夫、中島洋、松井亜樹、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ

事務局長：小林暁子

監査委員：齋田道子、野村信史

(会則第15条に基づく事務局、会誌編集委員会および部会)

事務局：(事務局長)小林暁子、(会計)佐々木保子、(副事務局長・広報)越野剛、(渉外)ラファウ・ジェプカ
会誌編集委員会：熊谷敬子、越野剛、塚本智宏、松山敏、ラファウ・ジェプカ

(会則第16条に基づく東京事務所)

東京事務所：(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

第6号議案 会則および、会費についての細則の改正について(2016年10月29日改訂)(提案 安藤厚)

【会則の改正】

第17条 〈…〉2017年度(2016.9.1-2017.8.31) 主な役員は以下の通りとする。

監査委員 齋田道子、野村信史

【会費についての細則の改正】

削除

2. 本会の会計年度は毎年9月1日にはじまり、8月31日におわる。ただし、~~2016~~会計年度は ~~2015~~年10月1日にはじまり、~~2016~~年8月31日におわる。(ただし書きは、~~2016~~年9月以降削除する。)

総会出席会員 17人、全議案が承認されました。

《第78回例会》報告 レクチャーコンサート：ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して、2016年10月2日(日)13:30～、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール

加藤一郎先生を迎えて

このたび、国立音楽大学の加藤一郎准教授をお招きして、レクチャーコンサートを開催しました。加藤先生はたいへん素晴らしいピアニストですが、ショパンに関する著作、論文を沢山書かれている研究者でもあり、今回はスティル・ブリゼ(Style brisé)の技法に焦点を当てて講演していただきました。

当日は、以前から加藤先生とご親交のあった熊谷玲子、高岡立子両先生をはじめ札幌大谷大学・同短期大学部の先生方にも多数お越しいたごき、小さな会場に約70人もの大勢の方にご来場いた

だきまして心からお礼申し上げます。

演奏者の皆様、当日お手伝いいただきました運営委員の皆様、また岡本孝慈先生にはたいへんお力添えを賜りまして、心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。(松井亜樹)



(左) 安藤厚、長崎結美、加藤一郎、久保田友、國谷聖香、田口綾子、坂田朋優、松井亜樹の各氏(写真 松山敏)

ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して

加藤 一郎

ショパンの音楽はしばしばポーランド民族音楽やオペラとの関わりや、彼の生涯との関わりから論じられます。しかし今回は、ショパンの音楽とバロック音楽の技法や美学との強い関連性について、スティル・ブリゼの応用を通してお話し、北海道在住の5名のピアニストと共に演奏させて頂く貴重な機会を得ました。この機会を与えて下さった北海道ポーランド文化協会の皆さま、そして当日ご清聴頂いた皆さまには心から感謝を申し上げます。

1. ワルシャワ時代のショパン

ショパンがその音楽の形成期を過ごしたワルシャワ時代(1810-31)、彼が先ずヴォイチェフ・ジヴニー Wojciech Żywny からピアノを習い始めたことは良く知られています。ジヴニーはチェコ出身の音楽家で、バッハを深く信奉していました。彼がショパンにどのような教育を行なったかは良く分かっていません。ショパンはその後、ワルシャワ王立大学附属中央音楽学校(現ショパン音楽大学)でユゼフ・エルスネル Józef Elsner から、J.S.バッハの弟子のヨハン・フィリップ・キルンベルガー Johann Philipp Kirnberger の理論書『純正作曲の技法』(1774-79)に基づいて対位法を学びました。そうした古い音楽理論をショパンが全く抵抗なく受け入れたかどうかは別として、彼の音楽学校時代の作品には模倣対位法やラメントバスが用いられており、彼がエルスネルに対して深い敬愛の念を抱いていたことは、彼がパリ時代にエルスネルに宛てた手紙からも

明らかです。ショパンはワルシャワ時代、当時のヨーロッパとしても古典的な音楽を学び、自らの美学の基礎を身に付けて行ったと言えます。

2. スティル・ブリゼとは

こうした古い音楽様式の中にスティル・ブリゼ Style brisé(打ち砕かれた様式)という技法がありました。これは17世紀のフランスのリュート音楽で生まれた分散奏法で、優美で即興的な趣味に富む技法でした。当時のリュート奏者、エヌモン・ゴティエの〈クーラントとドゥーブル〉(譜例1)を見ると、この技法が〈ドゥーブル〉の方に如実に示されているのが分かります。〈ドゥーブル〉は〈クーラント〉をこの技法で変奏していますが、その際、八分音符のリズムで和音を分散し、その中で旋律的な流れを作り、八分音符が和音と旋律の橋渡しのような働きをしています。また和声音が保続されたり、異なる声部が互い違いに動くこともこの技法の特徴となっています。この技法は直ぐにフランスのクラヴサン音楽にも取り入れられ、ドイツやイギリスにも伝播しました。ショパンはバッハやクレメンティ等の作品を通してこの技法を用いるようになったと考えられています。

3. ショパンによるスティル・ブリゼの様式化

ショパンはこの技法を、a 和音を低音から順次分散して奏する単純な方法でも用いましたが、b 和音を旋律で彩の様に分散する方法や(譜例2)、c 複数声部を対位的に呼応させる方法(《夜想曲》変

譜例1 エヌモン・ゴティエ 〈クーラントとドゥーブル〉より a クーラント、b ドゥーブル

譜例2 ショパン《ソナタ》口短調 作品58 第1楽章

ニ長調作品 27-2 第 71-74 小節等)で用いることもありました。a はあくまでも和音を音楽の主体とし、音楽の垂直的構造が優位となります。しかし、b になると旋律の役割が増し、和音を分散する音型がその箇所の音楽的性格に影響を与えるようになります。そして、c は和音を分散する音型が主体となり、音楽の水平的構造が優位になります。

こうしたことは、ショパンがバロック期のリュート音楽で生まれたこの技法を自らの音楽の中で多様な方法で様式化していったことを示しています。音楽は時代や地域を越え、伝播と受容の歴史を築いていますが、その一コマ一コマに個々の音楽家ならではの美学の探究が込められていると言えます。(かとう いちろう)

《第 79 回例会》報告

アンジェイ・ワイダ監督を偲んで

お話: 中島洋(シアターキノ代表)、ビデオ上映: 『地下水道』(1957) 『灰とダイヤモンド』(1958)、2016年12月5日(月)18:00~22:00、札幌エルプラザ 4F 大研修室



ポーランド映画を代表するアンジェイ・ワイダ監督が10月9日ワルシャワで亡くなりました。監督を偲んで例会を企画したところ、寒い中、会員を中心に25名の方々にご参加いただきました。

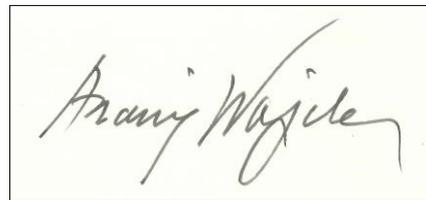
最初に中島洋さんによる作品解説が20分少々あり、ご自身の映画体験を交えて熱く語っていただきました(《追悼特集》を参照)。中でも『灰とダイヤモンド』の有名な2シーンについて「映像表現の普遍性」という観点からわかりやすく解説され、とても興味深く聞きました。中島さんにはぜひまた別の機会にゆっくりとお話を聞きたいと思います。

つづいて『地下水道』と『灰とダイヤモンド』を連続上映、会場使用時間ぎりぎりに終了しました。今回は元会員の藤平隆さん(池田町)*ご寄贈のポーランド映画VHSビデオテープ9本の中から選びました。大画面で見る画質に不安もありましたが、思ったよ

り鮮明な画像で会場の音響もまざまざでした。

会場アンケートには「熱烈な反戦映画。今日もどこかで争っているが、人間は戦う生き物かの思いです」「新会員として今日ここに来ました。愛はダイヤモンド、生きるはダイヤモンド」などの声がありました。ご参加の皆さまには感謝申し上げます。(園部真幸)

*藤平さんは12月13日に逝去されました。合掌。形見となったテープの活用法を考えたいと思います(小林)。



クラクフのManggha Centerの日本祭(1995.3.18)で思いがけずワイダ監督にサインを買った! (安藤瞬)

《アンジェイ・ワイダ監督追悼特集》

アンジェイ・ワイダ追悼

三浦 洋

ポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダが10月9日にワルシャワで逝去しました。第一次世界大戦後、ポーランド独立回復の8年後の1926年、ポーランド東北部のスヴァウキに生まれ、祖国の歴史と文化に殉じるように生きた90年と7カ月でした。

ワイダはまだ20代の若さで『世代』(1955)でデビュー。映画監督として活動した約60年間に残した長編30作・短編20作余りのうち、原点といえる「抵抗三部作」——50年代の『世代』『地下水道』『灰とダイヤモンド』——の代表作としての地位は揺らがないでしょう。一説によれば、日本で自主上映運動が広

がったのは抵抗三部作の上映がきっかけだったそうです。1949年生まれの作家、村上春樹が長編第一作の『風の歌を聴け』(1979)で主人公の「僕」に「(米国の「最後の西部劇監督」)ペキンパー以外の映画では、僕は『灰とダイヤモンド』が好きだ」と語らせているのは、この世代の関心を象徴的に表しているのかもしれない。

この作品については、本会の講演会「『灰とダイヤモンド』の成立と受容」(第74回例会、2016.2.5)で久山宏一先生(ポーランド広報文化センター)がくわしく解説されました。久山先生は2016年6月5~6日にクラクフで開催された「ワイダの90年」という学会で「日本から見たアンジェイ・ワイダ」と題して発表され巨匠との再会も果たされたので、それから4カ月後の訃報にはさぞかし驚かれたことでしょう。